

芹沢光治良

第三卷・愛と死

人間の運命 第二部

人間の運命 第二部

第三卷・愛と死

芹沢光治良

命の運の人

第二部 第三卷 愛と死



昭和 42 年 7 月 10 日 発行

昭和 44 年 8 月 10 日 7 刷

定価 450 円

著 者 芹沢光治良

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71

振替東京 808

電話(03)260-1111(代)

印刷・株式会社金羊社 製本・新宿加藤製本所
乱丁本はお取替いたします。

© by K. Serizawa. Printed in Japan

人間の運命

―第一部―

第三卷

愛と死



第一章

八時半起床。

朝食後、十時から一時間散歩。

十一時から昼食まで、書齋で勉強。

一時から二時間、仰臥療養。

三時から三十分散歩。

三時半から夕食まで、書齋で勉強。

夕食後は七時半に書齋に上り、十時半就床——

次郎がスイスの高原療養所を出て、日本へ帰る時に、十年間厳守するようにと、主治医から命じられた生活処方箋を、東京で実行すれば、右のようである。そして、それを、次郎はすでに二年間厳守した。

午前一時間と午後三十分の散歩は、日本人に散歩の習慣がないから、次郎にもつらいことだ。東京の街は散歩のできるようにつくられていないからだ、きまった時間に、毎日欠かさ

ず散歩に出る次郎に、近所の人々が目をそばだてるからでもある。もっとも、次郎は他人の目を無視することに馴れたが、しかし、同じ道をさけて、新しい散歩路を探すと、思いがけない露地に、静閑な地区があつて、目を洗うほどこつた生垣があつたり、知人の名前をしるした標札が、無造作にかかつていたりして、たのしいこともある。

辛いと言へば、昼食後の二時間の絶対安静もそうで、日本のような家庭では、不可能なほど困難が多い。死んだつもりで、無念無想に、寝椅子に仰臥しているのだが、どんな大事な訪問客があろうが、かりに家に火がつこうが、死人がよみがえる筈はないものとして、動いてはならないほど、安静をまもらなければならないから――

次郎は新居に移った時、庭づくりの植木師にたのんで、庭の南東の隅に、十坪ばかりのところに、ヒマラヤ杉を十本ばかり植えさせた。これから十年も療養生活をつづけなければならぬいならば、わが家の庭の一隅に、スイスの高原療養所の庭の一部を模したいと思つたからだ。ヒマラヤ杉をサバンと呼んで、その樹葉が空気を洗い、肺結核の良薬だと、言われて、サバンの樹蔭に寝椅子を持ち出して療養したものだ、わが庭に同じ片隅コナヘを、つくりたかつた。有田氏が岐阜からつれて来た植木師は、ヒマラヤ杉が伸びの速い樹で、庭に不向きだからとか、庭全体の調和を破るからとか、頑固なことを言つて賛成しなかつたが、最後には折れて、ヒマラヤ杉の樹を全部三米ばかりに切りつめて、それ以上のびないようにしてから、十本ばかり密集して植えた。そして、その一隅を竹垣で境をつくり、庭の調和を保つように工夫した。おかげで、十坪ばかりがヒマラヤ杉の森の一部のようになって、次郎は雨天でなければ、昼食後、

その森のなかにデッキ・チェアを出して、安静療養ができたが……

こうした処方箋に従った次郎の生活も、本人には生きるための必死なあがきだが、端の者には、怠け者のようで、理解できるものではない。特に、活動家の有田氏には、議会の開会中、東京で起居をともししていると、知らず識らず次郎が目ざわりになり、その生活態度がしんぎくさく感ずるらしかった。顔色もよく、病人でもなさそうなのに、うろろろしているのは、ちゃんとした職業がないために、小説書きなどしているからだと考えた。次郎の就職について、多くの人に頼んだが、不景気のこととて、東京では満足な就職口もないので、苦慮しているのに、本人が落着きはらっているようで、腑甲斐ないことだと、齒ざしりしたいが、婿であるから、あからさまに口に出せない——と、焦慮があった。

そんな気配を、次郎も感じとって、つとめて有田氏と顔を合わせないよう心をつかい、書齋にこもって、呼ばれなければ階下へおりないようにしたが、淋しいことの嫌いな有田氏は、ややもすれば、次郎君、次郎君と、呼びつけた。しかし、次郎は有田氏の好きな碁をうつではなし、将碁の相手も、酒の相手も、できなくて、すぐに有田氏を退屈させた。

「あれで、次郎君は、なんのたのしみがあるのかね」

有田氏は節子を労って、そう話したことがある。

「雲の流れるのを見ても愉しいと、言う人ですから——」

「早く就職口を探して、外で活動の場を持たんと、次郎君もくさってしまいうだろうが……主人に四六時中、家にいられたら、節子も気が重くて、休まる暇がないなあ——」

「自分は下宿人だと、言っているから、あたし気にしないことにしています」

そう節子はけろっと答えていた。

実際、この家是有田氏が主人で、すべてのことが有田氏の生活を基調に廻転していた。節子は朝から夜まで、父のことに心を奪われ、次郎が何を考え、何をしているか、何を食べたかさえ、知らないほどである。下宿人どころか、有田氏に仕えるべき人間のように、軽く扱っている。それがまた、次郎には気楽なことでもあった。節子は自己がないから、有田氏にかかわっていないければ、次郎の生活にはいりこもうとするであらうが、次郎の療養生活にも、創作生活にも、節子の手の触れる場所がないばかりか、節子自身、創作生活や療養生活が無縁で、嫌悪を感じるのだから、必ず不平や不満を次郎にぶちまけるにきまっている。それ故、次郎は下宿人のような気楽さを、却ってたのしめた――

庭に大輪の菊花が咲いている季節であった。或る朝の散歩に、次郎はまぎれこんだ露地から突然小店の建てこんだ繁華街に出た。すぐそばを、二輛連結の電車が騒々しい音をのこして通っていたが、西武電鉄の中井駅に近いのだろうか、次郎は賑かな街を避けて、古樸のそびえる路の方へ曲った。その時、森さんではありませんかと、呼びとめられた。角の八百屋の前に、林扶喜子が立っていた。小さい躰をめいせんの和服に包んで、エンジ色の毛糸の肩掛けをして、手籠をさげていた。五尺にも足りない小柄のせい、小娘のように見たが、手籠には白菜と蜜柑がのぞいていた。

「森さんは毎朝、お散歩ですって？ 天狗のように早く歩くって噂ですが、ほんとうね」

新進の女流作家は気取らずに、そう微笑みかけたが、次郎はわれにもなくとまどった。

その年の春、外交官の石田が愛読する女流作家を三人、学士会館に招待して会食した時、次郎をも勝手に招いて、三人に引きあわせたが、次郎はそこで初めて林扶喜子にあった。放浪生活をしたとか、女だてらに一升酒を飲むとか、かんばしくないことで新聞の文芸欄で騒がれていたが、次郎は同じ出版社から、同じ叢書のなかに同様に処女作を収録されて、同時に文壇に押し出されたという親近感の他に、その作品の抒情性を高く評価していたので、その日の帰途、同じ東中野駅で省線を降りてから、わが家に誘って、葡萄酒をご馳走して別れた。ところが、一カ月もして梅雨のうっとうしい午後、彼女から手紙が届いた。

それも「青森行きの列車のなかで」として、用箋もないまま、失礼ではあるがと、ことわってあったが、ハンドバッグにおさめてあった化粧紙であろうか、柔らかな和紙に、鉛筆の走り書であった。しかも、その文章が——お目にかかってから落着かない朝夕がつづいて、やむなく旅に出ることにしたが、今さびしい東北の野を走る列車に独りかけて、切なく貴方を想う、というような書き出しで、そのあとには、彼女の処女作の散文詩のように、心の景色をあらさまに無造作な詩の形に、つづってあった。

どんな意図の手紙か、次郎は判断しかねた。愛の告白にとらなければ、意味のない手紙であるが、女流作家がかりそめにも愛の告白をするとしたら、こんな風に、おそまつな化粧紙に鉛筆で書くであろうか。しかも、一回会ったぎりの男性に、女流作家が小娘のように、手放しの

求愛をするであらうか。しかし、愛の手紙でないとしたら、何を意味するのか——どう考えても、考えようがなくて、他意のない悪戯であると、軽く受けとることにした。しかし、一日おいて、彼女から厚い封書がとどいた。今度は普通の便箋にきれいなペン字が書かれていた。

「只今、青森の港の見える旅館です。」

畳のやけた六畳に、裸電燈が一つさがって、わびしい部屋です。

姫鏡台が三尺の床の間に仰々しくのせてありました。髪をなであげようと坐ったところ、横に抜毛の玉をすててありました。身の毛が弥立ちました。

こんなことなら、すぐ連絡船にのればよかったです。煙と汗を流したいばかりに、この旅館によったのが、いけなかったです。風呂さえあるかわからないような宿です。

外はぬか雨がけむっています、やはりじめついで暑いです。部屋の隅にちよくねんと坐って、独り泊るのだと思うと、吐息が出ます。何故旅に出たのか、くやまれます。このまま、東京へもどろうかと、切に迷います。

パリに行きたいと念じながら、こんな津軽の果に来てしまった私を、お嗤いになるでしょうか。どうお考えになるでしょうか。」

次郎は自分に宛てられた手紙でないような気がした。ご主人に宛てた手紙を、あやまって次郎名宛てにしたのであらうかと、疑った。それから十日ばかりの間に、函館と札幌から、絵はがきが届いたが、何れも、俳句のような短い文章を一行書き加えてあるばかりであった。そして、その後、彼女からは便りがなかったが、ちょうど百日目ぐらいに、ひょつくり八百屋の前

で、呼びとめられたのだ。

次郎はわれにもなく心が動揺して、とっさに答えられなかった。

「散歩なら、お急ぎではないでしょう？ 私の家へよって下さい——」

「林さんはこの辺にお住いですか」

「え、すぐ近くです……よかったわ、今朝はめずらしく買い物に出て、お会いできて——」

次郎は彼女について行くより他になかったが、その言葉のように、すぐ近くではなかった。小川の端を二百米も行って、西武鉄道の線路をわたり、下落合の丘陵の下の方を十五分以上も歩いた。その間、彼女ははずんだ声で話した。

「森さんの作品、難しいですね。私には書けない種類の小説ですから、安心して感心していただけます……題のつけ方が、無造作すぎないかしら、ブルジョア、我入道、黒、信者、風、昼寝している夫——即物的というのですか。みんななにか、かおりがないように……ね、仄々とした題を選んだ方が、とくではありませんか——」

「ぼくは無器用です」

「私は思いついた時に、小説の題をノートに書きとめておいて、たくさん題名の用意があります。例えば、泣虫小僧、赤い櫛、清貧の書、望郷とか、いろいろ……ですから作品を書く時や書けない場合など、その題名を見ているうちに、作品のモチーフが浮んで、作品が書けたり……また、作品ができ上ってから、ノートのなかで適當の題名をさがしたりします。今度森さんが作品をお書きになった時、私のためである題名から、選んであげましょうか」

やがて、彼女は下落合の岡の斜面に芝を張って庭に面した門前で、

「ここですの、お寄り下さい」と、言った。

芝生も陽をうけていたが、その奥に、大きな木造の二階建ての洋館が南向きに陽を浴びていた。彼女についてのゴシップや彼女の作品から考えて、彼女の住む家とは、とても想像できないような、立派な洋館である。次郎はわけもなく、吻くちづとした。

「ぼくはもう五十分以上歩いてしまいましたから、この次よせてもらいます」

「やはり一時間の散歩を狂わせられませんの？ お宅から十七、八分の近路を教えますから、この次は、二十分ばかりお寄りするつもりで、その近路をおいでになってね。ちょっと待って下さい」

そう言いおいて、彼女は小走りして、芝生のなかの石段を駆け上り、玄関の外に手籠をおくなり、駆けおりて来た。そこから二十米ばかり行つて、左に大根畑のなかの小径を、上落合の岡の方へ案内しながら、言った。

「あの家、健康的で、すばらしいでしょう？ 私の読者が、外国へ行つて、留守の間住んでくれて、頼まれたものですから……あんな洋館に住んでみたいと、少女の頃からの夢でしたが、人間って、住む家によつて心持まで変わるものね」

「そうですか」

「ほんとうよ……林扶喜子って、裏長屋で、着る物もなくて埃をかぶった哀れな女、というイメージがあるのでしょね。家へ訪ねて来る人がみんな、シンデレラ姫になったというような

目で、見るから、おかしくって……たかが、木造の古洋館に住んだからって、羨望や侮蔑の目で見られては、かなわないわ。要は文字よ……どんな小説を書くかよ、ね。森さんもあんな堂々たる洋館におるから、文壇からブルジョアだと言って、嫌われているという噂ですが……もうとも、森さんはブルジョアなんて題をつけたから、いけませんけれど」

「ぼくは岳父の家の下宿人です」

「林扶喜子のシンデレラ姫振りを見てやれって、悪意の訪問者が多くて……だから、近頃、本気にフランスへ逃げ出したくなります」

大根畑をぬけると、上落合の岡の上の屋並にはいった。そこを右に曲れば、わが家へ十分ばかりで行けることを、次郎は知っていた。林扶喜子はそこで別れて、大根畑のなかの径をおりて行ったが、次郎は不思議でならなかった。

東北の旅先から、あんなにも切ない手紙を書いたことに、一言も触れないことも、いぶかしかったが、小さい躰にはずむように話しかけたことも、どうしたわけか、理解できなかった。

あの手紙も、当今はやりのナンセンスとして、書いた者も書いた瞬間に忘れるのだから、受け取る者も、読んだ瞬間に、忘れればいいのだろうか。彼女は小説を書く時に、必ず、見えない読者に向って手紙を書くように、一筆まいらせ候と書き出して、一、二枚手紙を書いてから、小説の本文にはいると、初めて会った日に話していたが、自分にくれた、あの愛の告白のような手紙も、北海道への旅の序章として、彼女自身に語りかけた一筆まいらせ候であったかも知れない——それとも、小説家同士の友情を披瀝するのに、無意識のうちにいやらしく女らしさを

におわせたのではなからうか、それでなければ、今朝のようにさばさばした顔をして、親和して内輪話をしながら、大根畑のなかを送って来れない筈だが……次郎はいろいろ思い感った。

家にもどると、羽田親分が待っていると、言う。羽田親分の用のあるのは、有田氏で、自分には関係がないがと、次郎は疑ったが、次郎に話があると言うので、茶の間で節子があいっていた。羽田親分が話があるというのは、面倒なことにきまっているから、書齋に案内して聞こうとしたが、茶の間で、奥さんもしょに聴いて下さいと言って、すぐ、

「社長はいつ名古屋へ帰ります」と、詰問のような調子で、次郎に問いかけた。

「月末に会社の総会があるし、成夫君の入営もあるから、数日中に帰るように、言っておりますが——」

「社長はまだ代議士に未練がありますか。浜口さんに義理立てして代議士になったが、本人の浜口さんが亡くなられた現在、社長が議会に未練がましく出ているのは、みっともないです」「有権者を代表しているという責任感があるから、臨時議会にも欠席ができないのでしょうかね」

「数日中に帰るってことは、ほんとうですね。三週間以上も帰らないですからね。こんなに留守としては、いいことはおこらんです」

羽田親分に自分が叱られている思いがしたが、さて何を言おうとしているのか、次郎には真

意がわからない。亡き清水の次郎長を兄貴と呼び、有田氏をわが親分と尊敬しているから、その親分のために選挙違反で、この年齢で半年の実刑に服しても苦にならなかったと、自慢しているが、次郎は羽田親分と有田氏の関係を、実はよく知らなかった。土建業をしている羽田親分が、有田氏の鉄道布設を請負わせてもらったことで、世間的に男になったと、聞いているぐらゐのものだ。それにしては、その最後の言葉が、腑におちなくて、次郎は黙ってしまった。

「これから議会へ行つて、社長に会つて話しますが……その前に、森さんと奥さんには、社長に話せないことを、お耳に入れておきたかったです。手前も男だから、口が裂けても他人には申しませんがね……社長が議会で長い間、お留守をしたので、新舞子のお宅のおたつさんがいかにですわ。女中なら、それでもいいが、社長の二号だ、三号だと、世間に向つて自分で威張りちらしておきながら、社長の顔にどろをぬりかねないことをしでかしたですから……新舞子のお宅は新舞子駅のすぐ横で……あの駅長は社長が目をかけて、可愛がつていたが、若いもので、それをいいことにして、社長のお留守に、よくお宅を訪ねたらしいですわ。それが度を過すばかりか、おたつさんは酒を出して歓待するらしく、夜おそく真赤な顔をして出て来たり、夜しのんで行つたりする駅長を、見かけた者があつて……手前に注意して来たので、見逃す訳には、ゆかんでしょうが？ 手前は、かつとして、これで二人を成敗してやろうと思つてね」と、いつも風呂敷に包んで持っている日本刀を、膝の上にのせて、すごんだ目をした。

「社長に迷惑がかわかると思つて、それは我慢したが……駅長を非番の日に岡崎の家に招いて、酒を飲ませてご馳走したあとで、これを抜いて、膳の前において、命令したですわ。なにも文

句を言わんで、病気だからと言って、あした会社へ辞表を出せて……わけは胸に覚えがあらうが、黙ってやめれば、半年後、手前の会社に採用して、駅長の月給より多い手当を出すか、万一、辞表を出さないようなことがあれば、ただではおかんぞって、おどかしてみたですわ……腹わたのくさった意気地のない奴で、ふるえ出してね。翌日には辞表を出して、駅へ現れませんが。奥さん、お母さんは偉いお方ですよ、おたつさんは女中だからと、初めから問題にしないで……あの女の本性を、ちゃんと見抜いていられましたな」

次郎も節子も実は、博徒の親分をどう扱うべきか、その話にどれだけ真をおくべきか、ただ困った。

「社長も偉いけれど、ただ一つ欠点がありますな。女を見る目がないというか、女に惚れっほいというのか。もうお年だから、女では落第だと、今度はわかったでしょうが、おたつさんのような女に、裏切られるなんて、手前は腹が立ってね、あの女をこれで切りすててやりたかったです……だが、社長が一カ月も新舞子に帰らんのは、社長がすでにあの女をすてたのだからと、考えなおして、肚の虫をおさめました。どうです、社長は東京におって、品行方正でしたか」

次郎は黙りこくってしまったが、節子が答えた。

「ええ、なんです、人がかわったようで、気の毒なくらい——」

「そうですか。それなら代議士になったことも、無駄ではなかったですな。選挙違反を出して、子分共をつまずかせたけれど……そのために子分共は、社長に喰いつくから、社長も気の